

CASE

2

大宜味村観光協会
(沖縄県大宜味村)

沖縄本島北部・やんばる(※)にある大宜味村。その観光協会で、会長兼事務局長を務める大崎史丸さんは東京からの移住者です。その「よそ者」が、「おじい・おばあ」をはじめとした地元の住民と、どのように関係性を築いてきたのか。協働する際に心掛けていることなどを伺いました。

沖縄本島北部に位置する大宜味村

は、美しい海と森林に囲まれた、人口3千人に満たない小さな村だ。「長寿の里」「シークワサーの里」とPRしているが、近隣の自治体と比べ、観光地としての派手さはない。そんな村の観光協会で働くため、映像制作の仕事を辞めて2021年に東京から移住してきたのが大崎史丸さんだ。翌々年には、会長兼事務局長となり、村の観光振興に力を入れている。地元の魅力発信だけでなく、官公庁のモデル事業に携わるほか、役場が公募する町おこし関連の事業を積極的に受託。長寿の観光資源化から、世界自然遺産の生態系を守るための保護猫の里親募集まで、活動の幅は広い。最近では、大学生や高校生の研修も熱心に受け入れている。

そうした実績から、強い目的意識をもった町おこしの仕掛け人をイメージしそうだが、未来のビジョンを全面

SUMMARY

〔協働の目的〕

生物多様な自然を除き観光資源に乏しいと思われるがちな大宜味村の最大の魅力は、そこで暮らす人々そのもの。その価値を、観光客はもちろん村民自身に認識してもらうため各所と地道な関係づくりを行う。

〔協働する相手〕

観光事業者、役場の職員、おじい・おばあほか地域住民、地元の中学校、研修受け入れ相手の教育機関や学生・生徒など。

〔働きかけ方の工夫〕

まずは相手の話をとことん聞き、信頼関係を築くことからスタート。一方で、言語化手前の自分の思いを誰彼となく話し続けることで、言葉の意味を育てていく。また、わからないことは素直にわからないと言ったことから対話を広げていく。

に押し出して仕事の計画を立てるタイプではない。村の人たちと酒を酌み交わし、時間をかけて関係性を築きながら、必要なことを少しずつ形にしていくスタイルだ。

「事情を知らないよそ者」が熱をもつて、あれこれやろうとしても空回りし、求められていないことまでしがちです。誰かと協働するにしても、相手の性格

や嗜好、得意分野を知らずに協力依頼するのは違うと感じていて、時間をかけて信頼関係をつくるのが、長く関係性が続くための近道だと思っています」

大崎さんが、村の人に会いに行く際、決めていることがある。できるだけ、後ろに予定を入れないことだ。

「本当の用事は10分で終わるとしても、今朝採れた野菜の話や、お孫さんが遊びに来た話など、前後の世間話にこそ、その方の人柄や悩み、やりたいことなどヒントが隠れています。なので、『次の予定があるので、この辺で失礼します』とならないよう心掛けています。そうやってとことん話を聞くようにしていると、今もよそ者扱いではありませんが、『困ってるんだけど、いいアイデアないかな』など、向こうから声をかけ

※沖縄本島北部の、山や森林など自然が多く残る地域。

この方に聞きました

大宜味村観光協会
会長 兼 事務局長
大崎史丸さん

おおさき・ふみまる ●1987年大阪府生まれ。東京の映像制作会社に13年間勤めたのち大宜味村へ移住。2021年より一般社団法人大宜味村観光協会に勤務し、翌年事務局長、翌々年会長兼事務局長に。移住5年目の現在は「観光は、対話と交流をひらくもの」という視点から、村の未来を考える観光教育や、村人の暮らしを訪れる人にそっと手渡すようなプロジェクトに取り組む。





夕方になると、近所の人と酒を酌み交わしながらの会話が始まる。白浜区長の親川富成さん曰く「たまに、見かけない若い人が来たら、どこからねとか聞いてね、そしたら話が盛り上がるでしょ。県外から来た人は、違った見方で村を見てくれるので楽しいよ」

ていただけるようになってきました」
ただし、と付け加える。

「人の話を聞くと言いつつ、自分のこともべらべら喋っているんですけどね。相手は、近所のおじい・おばあだったり、役場の職員や観光事業者、観光客、滅多に会えないお偉いさんだったりさまであります。そうした場では、『なんとなくこんなことを考えてるんです』くらいの軽い気持ちで、言葉自体も未熟なんだけど、口にするだけで、相手から反

応があるし、自分でも持ち帰って勉強するじゃないですか。そうやって学び、考えを深めるなかで次第に、未熟だった言葉が、自分自身の本当の言葉に変わっていく気がするんです。すると、幸運なのか必然なのかはわかりませんが、関連する人を紹介されたり、貴重な情報を頂いたり、どこからともなく解決の糸口が訪れる。最初に意味を深く考えることも大切かもしれないが、それで言葉や行動が止まってしまうのはもったいない。意味はあとから育つものだと思います」

村の魅力と課題を広める 仕掛け「おおきみ案内人検定」

大宜味村観光協会では、大掛かりな観光イベントには力を入れていない。「それよりも、地域の人々との日々の関係性づくりが役割だと思っています。言うならば、Doing(単発のイベントや目に見える成果)より、Being(日常や暮らし、過程)の中にこそ、深い学びと

話を聞く。思いも伝える。その時点では曖昧な言葉でも、そのうち意味が育ってくる

問いが宿ると考えているんです。豊かな自然も自慢ですが、大宜味村最大の魅力は、土地に暮らす人そのものの。日々の生活の積み重ねの上に、素晴らしい文化があることを観光客はもちろん、村民にも再認識してもらいたくて」

そこで役場との協働で計画中なのが「おおきみ案内人検定」というエンタメ要素の強い観光教育プログラムだ。住民が村について学び、暮らしを見つめ直すことで、一人ひとりが村の観光案内人になることを目指している。「検定といっても、好きな時間にオンラインで受講できる簡単な内容です。問題の中には、村の魅力だけではなく、例えば400年続く祭りがあるけれど担い手不足で困っているといった弱みも伝えたい。それによって観光

客や、元村民が特産物を購入したり、村を再訪したりなど、手を差し伸べてくれる機会になればなって」

誰かのお仕着せではない意図せぬ 交流だからこそ生まれる関係性

今年度は、大学生や高校生の研修も積極的に受け入れた。

「大宜味村の魅力は暮らしそのものとは言ったものの、村には宿泊施設が少なく、日帰りの観光客が多いのが課題です。そんなことを、やはりいろいろな場所でき口にしていたところ、武蔵野大学ウェルビーイング学部先生を紹介いただき、実習先の一つとして、この夏19人の学生を受け入れることになりました。特別なプログラムではなく、自炊しながら16日間暮らし、村



の魅力を探るだけ。2週間近くいると、おじい・おばあも気になるのか、『バナナが食べ頃だから取りにおいで』『三線を弾けるおじいを呼ぶから一緒に踊ろう』など、意図せぬ交流が始まりました。各自がウェルビーイングとは何か実感したことでしょうし、私自身、無理に「長寿」を観光コンテンツにしながらも、共に過ごすだけで、観光になるんだと気づかされました」

**わからないと言った途端
不思議と、わかる人が現れる**

大崎さんは、地元中学校の総合的な学習の時間でも外部講師をしている。「村の教育委員会から『教員歓迎会で、大宜味村について語ってほしい』と依頼され、教育と観光の関わりについて話したことがきっかけです。初年度、観光をテーマに10回の講座を担当し、3年目の今は、担任の先生たちと相談しながら週1回、全30回の講座を開催しています」

学校と協働するなかで、どんなことを感じているだろうか。

「学校の先生は、言葉遣いに気をつける必要があるし、今どき、うかつに叱れない事情もありますよね。だからこそ私が代わりに、『世の中にはこんな大人もいるんだぞ』というスタンスで、本音で生徒に接しようと心掛けています。

それに関連して、先生方も、わからないことは、わからないと生徒の前で発してもいいのでは、と感じています。私の経験上、わからないと言った途端、不思議とわかる人が現れるんです。答えをくれる人とは限りません。同じく迷っている人や、かつて同じところで立ち止まっていた人からヒントをもらうこともあります。そういう私自身、東京で気を張っていた時代は、わかつたふりを続けていました。けれどそんな人間関係に疲弊してしまい、だからこそ『暮らしや会話が仕事の真ん中にある場所を探したい』とやってきたこの村では、わからないと声を出し続けた。それが誰かとの対話の始まりになると信じています」

取材後記

一般的に、他者と協働する際は目標を共有し、課題を洗い出して計画的に進めようとはしますが、大崎さんのアプローチは異なります。まずは相手の話をとことん聞き、信頼関係を築く。そこで生まれた思いや何気ない言葉に、時間をかけて意味を与え、成すべきことを見出していきます。ゴールをつくり、そこをみんなが目指すというよりは、まずは共にスタートラインに立ち、一緒に走り出すことを重視する。強固で、長い関係が続く秘訣なのかもしれません。

